

◆特集対談◆移住・Aターン



高濱夫妻が経営する木の香りが漂う店内

今回は移住・Aターンをテーマに、富町で注文家具を営む木工職人の湊哲一さん、彩霞長根でナッツ・ドライフルーツ専門店を営む高濱遼平さん、奈保子さん夫妻の3名にインタビューさせていただきました。

なお湊さんは、中心市街地の空き店舗を使って開業しようとする方を対象とした「空き店舗流動化支援事業」を、高濱さんは、市内で新たに事業を始めた方を対象とした「起業支援事業費補助金」を活用しています。

Q 移住したきっかけを教えてください。

遼平さん 6年ほど小田原市でナッツのお店を営業していましたが、妻のおばあさんや御家族が住む能代で過ごせたらと考え始め、移住を決めました。

奈保子さん 私にとっては故郷能代にAターンしたことになりますね。地域の商品をつくりたいという思いがあり、平成29年9月に開店しました。湊さんには店内の棚やテーブルをつくっていただきました。

Q 湊さんもAターンされましたが、能代で商売を続けることに不安はなかったですか。

湊さん 不安は今もあります。私は横浜市に住んでいましたが、横浜市とは人口規模も違うため、価格帯や売り方も考えなければいけません。常に模索しています。

Q 移住や事業を継続される上で市の制度は活用されましたか。

湊さん 木材を加工する際に音が出るので、物件探しには苦労しました。条件の合う物件が対象地域を少しでも外れると補助制度の要件を満たさないため、条件を緩和してもらえたら、起業や移住する人も利用しやすくなると思います。

Q 店内に入ると木の香りに癒やされますか。木に対してはどんな思いがありますか。

遼平さん その点は同感で、お店をやっていた人が移住後に事業を継続しても新規の起業扱いとはならず、受けられる制度に限りがありました。あと情報収集にも苦労しました。

奈保子さん 木都を感じる空間にしたかったです。恥ずかしながら能代にいるときは木都のことをよく知りませんでした。今の子供たちには小・中・高校と木都にふれる機会をふやしてほしいです。

遼平さん 木都を生かして、この地域の文化を学んだり知ることのできる場所がふえてほしいです。

湊さん 能代駅前はまだ木造の建物が多く、中心部に集える要素は残っています。廃業を考えている大工や木工所などから道具を譲っていたことで、移住や起業を考えている若手に手伝えることがあると考えています。木の香りが漂っていたり、加工する音が聞こえたり。木都の文化が感じられるまちづくりができると思っています。

Q 今後の活動または市に望むことをお聞かせください。

湊さん ほかの地域では教育で森や水といった自然を生かした学習をしています。能代にも思われた環境があるので、そんな取り組みをふやし、興味を持った子がいずれは能代に帰りたいと思えるようになってほしいです。

奈保子さん 実はお店のスタッフも相模原市から移住しました。地元紙でもAターンした方が紹介されていたので、意外にいるのかもしれないですね。お互いの話をしたり、交流する機会があればいいですね。

遼平さん 地元産の柿やハマナス等を生かした商品づくりをしていきたいです。カフェやバーの経営を考えている人が実際に練習できるスペースを店内につくりたいです。何よりも、能代の水道水と食べ物のおいしさに感動しています。

取材に御協力いただき、ありがとうございました。

取材：落合康友 佐藤智一 菅原隆文